

一、クリスマス、こどもの日という新しい形式の行事が家庭生活の中で大きな位置を占めてきていること。

二、七夕、節句、月見のような季節的行事がまだまだ意味をもっている。

三、時の記念日、勤労感謝、口腔衛生週間など、教育的に考えられた行事は、園側の意図に反して、家庭に浸透していない。

四、行事を中心とするカリキュラムは、大きな教育効果をあげると考えられるから、主題となる行事の選択には充分考慮がはらわれなければならない。

2、調査3の対象家庭は、京都市内のキリスト教幼稚園児九二名（昨年から在園の者）
（大会抄録135—138頁）

幼児の神仏観念について（第三報）

神田寺幼稚園 友松あきみち 深野浩代
井山不二子 松村美沙子
高木喜代子 米内みき

調査の目的 日本の幼児の神仏観念の現われとその発達について、過去二回にわたり調査報告した。今回は、その第三報で、キリスト教の影響の強いアメリカの幼稚園児の神観の発達はどのようであるかを検討したいと考え、少数ではあるが、米国のデトロイト、他等の協力を得て、日本幼児との比較をした。

調査の対象 三才四名、四才一〇名、五才六名、七才八才各一、計二五名。幼稚園に調査の方法を付記した英文質問紙を郵送して蒐

集した。（質問内容は、自然現象三問、神観一七問。第一報で既報した）

結果 自然現象に関しての質問は、四才後期から神を関連づけているものが、比較的少なくなつて「草や木を成長させるために」「空気がから」など、そのものの状態を示している。「この世の中は誰がつくつたか」によると、二十五名のうち十八名が「神」と答え、四才児でも六名が神と答えている。日本でも五才児においては、一般に神に対する観念が芽ばえてきてはいたが、米国児の場合は、四才においてすでに世の中を神が創造されたという神の全能と結びつけてきている。

神の観念については、「神の話をきいたことがあるか、誰に話をきいたか」の問に対し、米国児は八〇%が、日曜学校の先生や自分の母から話をきいてしており、日本の場合では、キリスト教立幼稚園において七四%きいたことがあるとなつていたが、全体的には三一%だけで大きい差がみられる。次に「それはどんな話か」では、「私達を愛してくれる」「神様は、私やこの世、鳥木をおつくりになりました」「神様はとても淋しかったので、この世と人々とお造りになりました」など年令差なく答えている。「他の神についてしていますか」に対しては、眠りの精と答えたものが一人だけで神は一人だけだということがわかり、全員が神を好きだと答えている。日本において、いろいろの神や仏があるのに対して対象的なものであった。

次に、「神の絵をかいてその中に自分もかき入れて下さい」の問には、神の絵はかけないからとか、自分を中に描き入れてない場合が多くあり、かいてきたのは十四名だけである。これは、私達が実際に質問を行つたのではなく、英文質問紙からだけでは無理があ

ったようにも考えられる。描画の表現は、神だけのもの、天上の神、動物達と遊ぶ神などで、日本では、神観、雲上の神、普通人、仏観では、仏壇、偶像、普通人の順になっている。

「神はどこにいるか」の問と考え合せてみると、天国十四名、雲の上六名の順で、日本の神観の場合も同傾向がみられた。「神をみたことがあるか」の問に対し、米国児では、みないが六八%、五才以後にはみたと答えたものはない。日本幼児の神観でも同傾向で、仏観ではこれがほぼ同数みられた。

更に、神の使命について「神は何をする人か」の問には、創造主、救世主について答え宗教的背景がよく現われている。わが国の神観では、創る人が多く、仏観では漠然としておりまた、死者と関連していたりして、考えの相違がみられる。「神はどんな力があるか」には、非常に大きい力、「誰が神になるのか」には、イエス様、わからない、誰もならない、マリア様の順で、日本での死者と関連しているものから比べると、唯一の神という考えがうかがわれる。「病気を直すのは誰か」では神様、医者様の順で、日本の、医者、神様の順からみると多少のちがいをみせている。「神と人とは同じか、ちがうか」では、「ちがう」と年令順にはっきりした解答をしている。

結語 以上少数資料からではあるが、対象となった、米国児と日本児の神仏観念のちがいは、米国児も、三、四才時代には、神と人間との観念が混沌としているが、五才以上になると神を至上至善のものとして幼児なりの世界観ができあがっていることがわかる。

これに対して日本では、宗教感情が日常生活の中から具体的にとらえられており、仏と死者との混同がみられるなど、その内容にもとぼしい。

米国と日本の幼児の宗教観念は、自然発生的な芽生えにおいて

は、さして差はみせていないが、キリスト教の精神を幼児時代から日曜学校や家庭の中で教育されている米国の場合と、精神的な宗教性のない社会の中に育っていく日本の幼児の場合とは、道徳性や、その内容においても異っていることがわかる。

これからの宗教教育そればかりではなく、広い意味での人間教育に保育の場としても考えなくてはならないものがあるように思う。

(大会抄録138—141頁)

幼児後期の道徳意識の分析

(第二報 分別について)

愛育研究所 村山 貞雄

市村 尚久

(一)

本研究で取り扱ってきた《道徳意識》という概念には、単純な善悪についての知識から複雑な生活場面で想起される情意的な対処傾向までが、その内容として含まれている。前者は、ピアジェらにより道徳的判断とよくいわれているものである。後者を研究者は、道徳的分別とよぶことにした。この道徳的分別は、過去の経験を通して形成され、次に予定される道徳的行為を規定する要因と理解するものである。

今回の研究報告では、幼児後期の道徳的分別の発達の姿を分析的に検討した結果の一部分をとりあげたに過ぎない。

調査は質問紙(幼児用道徳検査・日本保育学会第十回大会発表要旨三)